
『留守デン』

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『留守デン』

【Nコード】

N7134H

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

ようやく就職できた会社での条件は家デンを持っている事だった。
千子ゆきこは咄嗟に『ある』と応えてしまう。困った千子はゴミ捨て場で
電話機を拾うが……その日から彼女の部屋には異変が……。

【第1話】（前書き）

久しぶりのホラー小説の投稿です。

そう複雑なお話ではないので、暇つぶし気分でお読みいただければ幸いです（^^）

短期連載の予定です。

【第1話】

駅を降りると、空は夕焼けに紅く染まっていた。商店街の入り口にある大時計がオレンジ色に陽射しを跳ね返している。

千子^{ゆきこ}は目を細めて大時計の時間を見ると、自分の腕時計があっているか確認した。

不景気の最中、やっと就職の面接に受かり、雇用契約書の手続きの為、会社へ行って来た。

池袋の裏通りに在る雑居ビルの一角に狭いオフィスを構えた輸入販売の会社だ。

インターネット販売を専門としている為、オフィスは小さくていいのだというが、すぐ隣に借りる別室の倉庫には在庫の山が眠っており、そのスペースはオフィスの倍はある。

配管がむき出しの通路は狭く、十二階あるビルのテナントは半分以上が埋まっている。

それでも千子は諦めの中に、それなりの安堵を感じていた。

短大に入ったものの、去年からの大不況で全く就職活動はままならなかった。

卒業までには何処かへ入れるだろうと思っているうちに、肌寒い春の卒業式はあつと言う間にやって来た。

就職浪人する学生は多く、千子の友人も何人かはまだ正規の職にありついてはいなかった。

友達といっても、そう親しい友人はいないのだが……。

千子は極端な人見知りで内向的だった。

大学でもときどきランチを一緒にする仲間ができたが、何処かへ遊びに行くような事はほとんどなかった。

度々誘われはしたが、必ず他の大学の男性が一緒だったりして、どうにも気乗りできる物ではなかった。

千子がようやく面接に受かった会社では、ひとつだけ成約があった。

それは家デンを持つている事。

家デンとは、自宅の電話の事だ。

最近では携帯電話さえあれば事足りるし、何かの手続きの際でも携帯番号で充分に対応できる。

親兄弟のいる実家ならいざ知らず、独身者なら今更、新たに家に電話回線をひく者など皆無に近いだろう。

それでも会社では未だに家に電話回線を持っている事が、何故か必須とされるらしい。

千子は茨城から東京の短大へ通うために上京してきた。

もちろん、就職も東京で。と言うのが最初からの目論見だったが、この不況で両親は実家に帰って来いと煩かった。

「田舎に帰ったって、ますます働き口なんてないよ」

千子は母親から電話が来るたびに、そう言って帰郷を避け続けた。

千子はふらふらと人波に飲まれながら商店街を歩いた。

ネット回線をひいているから、IP電話がつながるはずだ。しかし、電話機をどうするか考えていた。

最近家電売り場で売っている凝ったFAX電話機は、意外といい値段が付いている。

アルバイトはしていたものの、生活は楽ではなかった。

千子の容姿は一見ナチュラルで可愛い。

卵の先のような顎のラインやキュツと上がった二重の目尻。

しかし性格が少々暗い……。

いや、決して暗いわけではないのだが、ノリが悪い。

ノリが悪いわけではないのけれど、人見知りするからアルバイト

先でも人に馴染むのに時間がかかった。

時間がかかっているうちに、先方の彼女の容姿を重視した大きな期待は瓦解してクビになる事もあった。

容姿で採用するような仕事はたいがいそうだ。

携帯電話会社のキャンペーンやビール会社のイベント。

時給のよい仕事は、容姿を重視するものが多く、千子も手っ取り早くそれらに応募する事が多い。

短期間で通常の一月分の収入になるのは、やっぱり魅力だ。

しかし受かるのは簡単なのだが、たいがい途中で解雇されてしまうから、結局たいした収入に繋がらない。

ハキが無い……暗い……元気がない……あたま悪そう……。

だから千子はお金に困っていた。

仕送りは家賃と光熱費と学費の分しか貰っていないから、食費とその他の出費は自分で何とかしなくてはならなかった。

短大を卒業してからは、なんとか家賃だけは仕送りしてもらっていたが、地味な生活にもそれなりの支出がある。

就職が決まったと言っても、3ヶ月間は試用期間だ。

ここに何とか引っ掛かってしがみ付こう。

千子は、既に持っているIP回線の番号を会社に提示した。

直ぐにでも電話機を取り付けておかないと、確認の電話が入る可能性がある。

商店街を抜け出ると人波はまばらに、左右へ伸びる住宅街の路地へ散ってゆく。

連なる街路灯には灯が燈って、夕闇を照らしていた。

駅から徒歩8分。不動産会社の地図では徒歩3分と書いてあったが、千子の歩くスピードでは8分が限界だった。

一度だけ路地を曲がって直ぐ角にある三階建ての小じゃれたワンルームマンションは、月6万8千円。

階段での三階は疲れていると面倒だが、上に住人がいないのはヤツパリ静かでいい。

コンクリートの階段をコツコツとヒールの音を鳴らして歩く。

二階部分の踊場に到達した時、突然人影が現れて一瞬ギョツとした。

二階の住人の男だった。一瞬立ち止まって千子を見ると、俯くついでのような会釈をして通りすぎた。

千子は会釈を返す間も無く、通り過ぎる男をチラ見する。

何となく目つきがイヤラシイから、生理的に受け付けないタイプだと以前から思っている。

男は二階の奥の角部屋に住んでいるようだが、そこは千子の部屋の真下に当たるため尚の事気味が悪い。

会うと必ずさっきのように小さな会釈をするが、目を合わせようとはしない。

それがよけい気味が悪いのだ。

血のめぐりの悪そうな顔は半分、中途半端に伸びた髪の毛で隠れている。

彼女は足早に階段を上がった。

部屋に入った千子はフウツと息をついて、バックを床に置きベッドに腰掛ける。

一度腰掛けた腰を上げて、インターネットのルーターを確認する。電話機を繋ぐ接続ポートを確認して、溜息を零す。

「どうしようか……」

唸るように小さく呟きながら、リクルートスーツとストッキングを脱いで部屋着を手にした。

「家デンなんてないよ」

大学ですつと一緒だった明奈^{あきな}が電話の向こうで言った。

彼女とだってたいしていろんな場所に遊びに行ったりはしていな

いし、他から見ればそれほど仲のいい友達には見えないかもしれない。

それでも大学構内ではおそらく、一番親しかったと思う。

今春、就職にあぶれたひとりでもあり、そのせいかこうして時折電話をかけてくる。

会社の雇用契約をしたこの日の夜も、彼女の方から電話をかけてきた。

「リサイクルショップでいいじゃん」

「ああ、そうか」

千子はベッドに寝転んだまま言った。

「2,3千円で買えるかなあ？」

「それは無いんじゃないのぉ」

「うそぉ」

千子はベッドに流れ落ちた自分の髪を空いてる方の手で触った。

人差し指をクルクルと毛先に絡めてみる。

「普通の電話だよ。なあゝんにも付いてなくていいんだよ」

「そんな電話、今時無いから」

明奈はケラケラと笑いながら、声を上げて言う。

言われて見れば正月に帰省した時、実家の電話も何時の間にかFAX付きの電話機に変わっていた。

大きな液晶画面に着信が表示されて、選択して印刷できるやつ。

新しい物に興味を示さない両親の事だ。選択肢が他に無かったという事なのだろう。

「今月苦しくてさ」

千子がボソリとぼやく。

「あんた先月のイベントのバイトも途中でリタイヤだったもんね」
明奈はそう言ってクククつと笑うと

「それよりさ、昨日面接に行った会社のジジイがさ……」
話しは他の話題へ切り替わった。

六月の空模様は気まぐれで、朝晴れていたと思うと黒々とした雲があつという間に頭上を埋め尽くす。

この日もそうだった。

金欠の為家で大人しくしていた千子は、朝から洗濯をしていた。物干し一杯にＴシャツやブラウスをハンギングして干した。

しかし、昼前には急に雲行きが怪しくなつて雨がぱらつき始め、慌てて全部取り込んだ。

「もう、天気予報は晴れつて言つてたのに……」

洗濯物を取り込んでいる最中に、雨は強さを増してベランダを激しく濡らす。

あつと言う間に外は煙るような水しぶきに包まれていた。

テレビを点けても落ち着かず、ベッドに腰掛ける。

昨日の雇用契約の際、家の電話を確認された。

来週の初出勤までには電話を用意してはいけなйдらう。

使いもしない電話を購入する事は、気に入らないブランドバックを無理に買うみたいであまりにも無駄な出費のような気がする。

カードで買えば簡単に済むのだけれど、そう言つた考えがどうにも彼女を躊躇させていた。

それに、今月はもうカードで3万くらいは買い物をしてしまっているから、自分でももう使つてはいけなйдような気がする。気がしてならないのではない。もう使えない。

「ああ……」

溜息と共に、声が零れる。

窓の外を眺めると、何時の間にか雨は小雨に変わっていた。

気分を変えようと外に出た。

ドアを開けると、少し冷やりとして湿った空気が通路に漂っている。

マンションの階段を下りると、右手に集合ポストが並び、その裏

側は丁度コンクリートブロックで囲まれたゴミの集積場になっていた。

階段を下りながらふと下を見下ろした時、千子の目に飛び込んできたのは、あまりにも都合のよい物体だった。

「あつ、あれって」

小走りに階段を駆け下りた。

スニーカーを履いていたので、逸る足音は聞こえない。

集合ポストの上に来た時、階段の途中からもう一度ゴミの集積場を覗き込む。

月末にはまだ間が在るのに、粗大ゴミが幾つか捨てられていた。

このマンションの住人が誰か引越すのだろうか。

季節はずれの温風ヒータと古いビデオデッキ。小さな食器棚の横にはお目当ての物が確かにあった。

階段を下りきって、集合ポストの裏側に回り込む。

千子はそれを手にとって眺める。

電話機だった。

古い型で、それこそ何も付いていないただの電話機。

平らな四角い本体は、おそらく90年代頃のありふれたデザインで、ピアノブラックの表面は小キズとホコリでくすんでいた。

付属のコードが、本体にグルグルと撒きつけて在る。

本体にアンテナが付いているところを見ると、子機が付属していたのだろうが、子機らしきものは何処にも見当たらなかった。

まあ、別にいいや。と思ってそのまま電話機を片手に、今下りてきた階段を足早に上った。

午後の陽射しに、雨上がり特有のコンクリートが湿ったような匂いが窓から入り込んでくる。

千子は汚れた電話機をタオルでふき取り、電話回線を繋いだ。

電話機からは電源コンセントもひとつ出ているので、何だか解ら

ずとりあえずそれも繋いだ。

ピピッと音がして、プッシュボタンの数字の部分が点滅した。

「なにコレ？」

無意識に適当なボタン、数字の3に指を伸ばして押すと、点滅は収まる。

受話器を持ち上げて耳にかざすと、プーーーーーという信号音が確かに鳴っている。

これで電話は使えるはずだが、千子は念のためその電話機から自分の携帯電話へコールしてみた。

トトトトト。っという信号音の後に呼び出し音。

ブブッと、テーブルの上のケータイが震えだして着メロが鳴った。

「大丈夫だ」

千子は一人ほくそ笑んで呟く。

心配事が消えると、何だか妙に清々しい気分になった。

ベランダに出て、雨上がりの外の景色を眺める。

住宅街の路地の一本先は、建設会社の大きな社宅を挟んで目白通りがある。

車の往来する音が、静かに聴こえてきた。

【第1話】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

ありきたりのお話かもしれませんが……（^^）

お暇が在る方は、次回も宜しく願っています。

【第2話】

帰宅ラッシュの駅は混雑していた。

初日から残業があつて、千子が池袋の駅へ着いたのは7時を過ぎていた。

人混みは時間の流れに関係なく、いつまでも何処からかあふれ出して続いているようだった。

昼間に降った雨は乾いて、歩道の隅に僅かな水溜りを残すだけだった。

千子は小さな水溜りをピョンと跳ねて、横断歩道から駅の構内へ向う歩道に足を運ぶ。

地元の駅構内を抜け出ると、商店街の半分はシャッターが下りていた。

残りの半分は煌々と道をてらし、その明かりに人波が消えて行く。仕事をしてきたという安堵の混じった疲労にかられて、千子は靴音を鳴らして歩く。

アルバイトの時とは違う。

これから当分は続くであろう同じ日々のリズムを思うと、大学へ入学した頃の気持ちに似ていた。

マンションの階段を上がると、部屋に入ってスーツを脱いだ。

リクルートの時とは違う、濃いグレーのスーツ。

ブラウスは水色で、下着は……関係ない。

オフィスで制服に着替えるから、普通の私服通勤でいいらしいが、新人なので暫くはスーツで通おうと思う。

部屋着のジャージに着替えると、コンビニで買ってきたパスタを電子レンジへ入れた。

ふとテーブルの下に視線が行く。

コードを伸ばした電話機が、ラグマットの上に直置きされて、用無しとばかりにテーブルの下へ追いやられていた。

昨日の夕方、家デンに会社から連絡が入った。

今日の始業の確認。という名目の、家デンの確認だろう。

もつかかってくる事なんて無いのだろうと思い、テーブル下に追いやってしまった。

そう言えば、よく見ると留守録ボタンがある。

千子は急にそのボタンに興味をそそられて、床に膝を着いて電話を覗きこんだ。

拾った電話機の留守録には、何か入っているだろうか……。

『留守』という大きなボタンの横には『再生』という小さなボタンがある。

異常な好奇心にかられた千子は人差し指を伸ばして、そっと『再生』ボタンを押してみた。

『1月・7日・午前・1時・15・分……』日付が先に、たどたどしい電子音声で奏でる。

千子は息を飲んだ……入ってる……。

いかにもその電子音声は古めかしい。

『……いち、いるんでしょ。わかってるんだからね。いるのわかってんだから……』

たどたどしい電子音声の後に聞こえてきたのは、女性の切り裂くような激しい声。震えて叫んでいるような声には、明らかな憎悪を感じる。

「な、なに？ これ」

声の後にはガサガサ、ガサガサ、と言うノイズ。

プツリと音が途切れて、ピーーと、信号音。

『1月・8日・午前・1時・15・分……』

『……いち、いい加減にしてよ。……いるんでしょ。出てよ。わかってんだよ。どうして出ないの！ 出なさいよ！……』

途中に微かなノイズや音声の揺らぎがあり、無意識に聞き耳を立

ててしまう。

終わった声の後に、ガサガサと何かを引きずるような音が暫く続く。

千子は硬直したように聞き耳をたてる——なんの音？

ザザッと音がしてプツリと音が途切れると、ピーーッと録音終了の信号音。

録音音声の出だしはノイズがはいって、なんという名前を言っているのか聞き取れない。

同じような用件が1月7日から14日まで毎日入っていた。

やっぱり男の名前は聞き取れない。

思わず全部聞いてしまった。時々ノイズで聞き取り難い部分があって、余計に意識は引き込まれた。

まるで遠くで微かに聞こえる誰かの呼び声に耳を澄ますように。

聞き終わった千子は、深く息をつく。

何だろう……。

正直気味が悪かった。

緊迫していた気持ちが融解して、もう一度フウッと長い息をつく。痴情の繾綣か何かだろうか。

この男は、結局この女性の電話には出なかったのだろうか？

千子は指を伸ばして『消去』という小さなボタンを押す。

ピーーッと信号音が鳴って『録音記録を消去しま・した』

何となく、わけの判らない安堵が気持ちを満たす。

溜まった汚物を処分したような、奇妙なスッキリ感。

遠くでパトカーのサイレンが鳴っている。

さらに遠くへ、それは消えていった。

電子レンジで温めていたパスタを思い出して、千子は急いで腰を上げた。

【第3話】

ネット通販のショップと言うのは意外に儲かるのだろうか？

千子はそんな疑問を抱きながら、まだ入社して間もない週末の残業に追われていた。

昼夜問わずに発注が来る商品を整理して伝票を上げる。

注文書はネットからの購入記録で自動的に上がってくるから、それに連動するソフトで伝票を上げるだけだ。

ただ、少人数でやっているこの会社は、そこらが面倒だ。

全ての在庫を自社に抱えているわけではないから、他社に依存する商品をデータ化して発注しなくてはならない。

海外からの直送もあるので、注文書の確認には注意を要する。

在庫を持っている商品に関しては、送り状を発行して自分たちで出荷準備する。

事務処理専門の女性は3人いて、他に男性の事務が一人。それと提携する会社やメーカーを随時探してくる営業が3人いる。

社長は別室で書類整理か、海外に出て珍しい商品を探してくるよう、千子はまだ面接後には顔を会わせていない。

この日、仕事が終わったのは夜の9時だった。

「疲れたでしょ」と事務の先輩である有木理絵ゆつきりえが優しく声を掛けてくれた。

千子は人見知りするが、仕事はテキパキと真面目にこなす。

ノリが悪いと怒る先輩もいないし、少し難儀な性格の千子をそれなりに認めてくれているようでもあった。

それは面接時に社長と一緒にいた営業部長の笠原もその通りで、事務の先輩である有木理絵ゆつきりえにもそれとなく「よろしくたのむよ」と声をかけていた。

池袋の駅構内で、一緒に歩いてきた理絵と別れる。

彼女は東武東上線だから、西武線の千子とはまるっきり反対方向へ行かなければならない。

「お疲れ様」

理絵が手を振るので、千子も小さく振りかえした。

自分よりも五歳は年上のはずだけれど、手を振る姿がなんだか可愛らしいと千子は思った。

週末の電車は酒臭い。

それに女性の化粧品、フレグランスの匂いが混ざるとそれこそ悪臭そのものだ。

終末の夜、電車内は悪臭にまみれている。

千子は出来るだけ口で呼吸をしながら、できるだけ隅のほうで小さくなって座席の端についている手すりを掴んだ。

一駅だけの辛抱だ。

乗降駅に着いてドアが開くと、彼女は他の乗客を少し強引にぬって駆け足で車両を飛び出した。

夜の風が心地いい。

くすんだアスファルトの匂いと湿った風も、こんな日にはやたらと美味しく感じるものだ。

息について階段を上り下って、改札を抜ける。

遅い時間にも関わらず、無数の靴音が商店街や、その手前の細路地に消えて行く。

梅雨の中休み、夜風は涼しかった。

群青の雲が風に流れると、三日月がぼんやりと顔をだして、朧に月影を照らす。

カサカサと風にそよぐ木の葉の音。

ふと路地を覗くと、小さな児童公園に植えられた樹木の葉が、サ

ワサワと風に揺られていた。

黒々と揺れる大きな樹木に生い茂る葉は、路地裏の闇を色濃くしている。

何となく立ち止まった千子は、再び靴音を鳴らしだした。

玄関を入ると直ぐに、千子はコンビニで買ったお弁当を電子レンジに入れる。

それからカバンを置いて、服を着替える。

ふと下を見た時、留守電の赤いランプがチカチカと点滅していた。昨日の夜、何となく思い立って留守電をセットしたのだ。

せっかく留守電機能があるんだから、ちょっとイジって見たかった。

自分のいない間に、電話してくる誰かはいるのだろうか……？

しかし、今留守電ランプを見た瞬間に考える。

考えてみれば千子の家デンの番号は誰も知らない。

知っているのは今働いている会社だけ。

おそらく何かの勧誘とか、イタデンとか、そんな類たぐいだろう……それ

れか、退社後に会社で急用でもあったか？

でも、それなら携帯電話にかかってくるはずだ。

彼女は膝について電話機に手を伸ばす。

電子レンジが『チンッ！』と鳴った。

指が再生ボタンを押す。

プチッとした小気味良い感触の押し具合だ。

風が強くなったのか、ベランダに出る窓をカタカタと軽く叩いている。

『6月・17日・午前・1時・15・分……』

——昨日の夜中？

留守電の録音は、昨夜だった。日付は既に今日だけれど……。一瞬で思考が巡る。

——電話、鳴ったのかな？ ぜんぜん気付かなかった。

千子は熟睡していても、小さな地震の揺れなどで敏感に目が覚めるほうだった。

彼女は温め終わったお弁当を取り出す為に、電子レンジに向かうと腰を上げる。

『ガサガサガサ……』

何かを擦る音。

紙くずを擦り合わせるような音がする。相変わらず所々に雑音が混じっていた。

背中を向けて留守電の再生音声を聞いた。

窓がカタカタ鳴っている。

『……いち、いるんですよ。いるのわかってるんだからね』

千子は再び直ぐに屈み込んで、そのまま思わず床に尻餅をついた。

【第4話】

どうしてあの女の声が、再び自分の留守電に入っているのか、千子は理解できなかった。

直ぐに消去ボタンを押して息をつき、コンビニ弁当を半分だけ食べて風呂に入った。

閉鎖されたクリーム色の空間に、シャワーの湯しぶきが飛ぶ。目を閉じて髪を洗う。

シャンプーを泡立てて、長い髪の毛を丹念に揉み解す。

シャワーの音に、さっきの女の声が耳の奥で蘇える。

慌ててシャワーで髪を流して、顔を手で拭って目を開ける。

クリーム色の閉鎖された空間……いつもの浴室だ。

シャワーカーテンの向こうで人の気配がする気がした。

「だれがいる？」

思わず声が出たが、だれもいるはずはない。

シャワーの音だけが、湯気に染み渡る。

そっとカーテンを、少しだけ開けてみる。

やっぱりだれもない。

感じた気配はバスルームの扉の向こうへスッと逃げたような気がするが、そんなはずは無いのだ。

落ち着かなくて、湯船から急いで出るとバスタオルで身体を拭いた。

寝巻きのスエットを着てベッドに腰掛ける。

テーブルの下には電話機が佇んでいる。

——また、夜中に電話が来るだろうか？

千子は電話機を見つめる。

留守録機能は解除したままだった。

時計は11時を過ぎたところだった。

千子は点けっ放しにしているテレビのリモコンを手に取り、ボリ
ュームを少しだけ上げた。

深夜の空気は思った以上に静けさに満ちていた。

カーテンを少し開けて窓の外を見る。

ぼんやりと浮かんでいた三日月は、見えない位置へ動いていた。

夜の闇だけが、窓の外を満たしている。

普段は聴こえるはずの大通りの車の音も聞こえない。

まるで世界が死に絶えたような闇。

千子はシャツとカーテンを閉めなおし、クッションを枕にベッド
に寝転ぶ。

テレビの上の時計が、もう直ぐ1時になる。

千子は眠気と戦いながら、かかる電話を待っていた。

もしまたかかってきたら、直接とって、文句をいってやろう。

そんなちよっぴり強気な気持ちもあったが、そもそも千子の繋い
だ電話にどうして電話がかけられるのか。

それも問いたしたい。

しかし、睡魔は威力を増して、そこそこに仕事場で頑張る千子を
包み込んでいた。

湯船に浮いたまま闇の底にゆっくりと引き込まれるような、火照
った浮遊感が千子を飲み込む。

闇の底は、心地よかった。

アラームの音が、部屋を満たす。

小さな音だったそれは、ふと意識が覚醒した途端にけたたましく
響いていた。

千子は細長い腕を伸ばしてデジタルの小さな目覚し時計に手を伸
ばす。

ベッドサイドにある小さな小物入れの上に無造作に置いてある時計を、手探りで掴むと胸の前に引き寄せてボタンを押して回す。

目覚まし時計のアラームを止めるには、ボタンを押した状態で少し廻さなければならぬのだ。

カーテン越しに、朝の陽射しを浴びる。

千子は薄目を開けて、ゆるい朝の光に満ちた部屋を見渡しながら、身体を起こす。

朝の6時……髪の毛の寝癖を直して化粧をしなくては。

千子はのろのろとベッドから起き上がって、ヘアーブラシと寝癖直しのミストを手取る。

少し寝不足だ。

——なんで寝不足なんだっけ……。

千子はボーっと天井を見て、それからテレビを点けた。

外からは、既に朝の喧騒が聞こえる。

車の走る音、鳥の鳴き声、学生が歩きながら喋るやたら響く声。

深夜の死に絶えたような世界が、再び息吹いている。

千子は小さな鏡台を覗き込みながら、髪をとかす。

今日はそれほど、寝癖は酷くないな。と思いながら立ち上がってカーテンを開けた。

部屋が白い光に包まれた。

梅雨の中休みが続く晴れ間。

蒼い空には、瑞々しい白い雲がぽっかりと浮かんでいる。

千子は思わず腕を天井に向けて大きな伸びをした。

しかし何かが背中中でチラついていた。

朝の光を浴びた部屋の置物全ての中で、それだけが光を受け付けないかのように黒々と静まっている。

「ん？」

千子はゆつくりと、静かに振り返る。

小さなテーブルの下にある黒い電話機。

小キズがあつて、艶はない。

まるでそこだけが、小さな闇に包まれている。

遠い昔から置き去りにされて、時間が止まっているようだ。

それとも死に絶えた闇の一部分が、そこにだけ残像を残しているのだろうか。

時を刻まないほの暗く包まれた領域で、留守電ランプの赤い光が、ゆっくりと点滅していた。

【第5話】

「ユキちゃん、どうした？ 疲れた顔して。残業でバテた？」

お昼どき、理絵が声をかける。

会社近くのコンビニで買った小さなお弁当に箸をつけて

「ううん。そんな事ないですよ」

千子は小さな愛想笑いを浮かべて、ペットボトルに入ったお茶を手にする。

まだ相談できる相手ではない。

千子にとって、会社で毎日一緒に仕事をする連中は、ただの同僚や上司でしかない。

その人たちに、個人的な事を相談する気にはなれなかった。

しかも、拾った電話機の事を言うわけにもいかない。

—— そうだ…… どうせ拾ったのだから、捨ててしまおうか？ で
も、再び会社から電話が在るかもしれない。

千子は小心者だから、そんな考えが直ぐに浮かんでしまう。

電話が壊れたとか、どうだって言い訳は在るのに。

夕闇に溶け込んだ路地が、静けさに溶け込んでゆく。
灰色のコンクリートブロックの塀は途切れ途切れに、路地の両側を挟み込んでいる。

疲れてるみたいだし。そういつて、定時で上がらせてもらった千子は、初夏に漂う蜻蛉のように歩く。

たまには自炊でもするかと、駅前のスーパーに寄って食材を物色した。

就職活動中は極力自炊していた千子だが、定職についてからは毎

日が慌しくてついついコンビニなどの弁当になりがちだ。

何と言っても、出ていくお金の量が違ってくる。

「はあ……」と溜息混じりに食材を眺める。

あまり食欲はなかった。

焼きそば麺と冷やし中華とそうめんを買う。

なんだか料理の領域からは外れているけれど、自炊に変わりはないし安上がりだ。

食欲の無いときには麺類にかぎる。千子はいつもそうだ。

マンションの階段をゆつくりとした足取りで上る。

途中の踊り場であの男に出くわした。

陽が落ちかけた薄闇に浮かんだ姿でも、千子には直ぐにわかった。彼女の真下に住む、二階の住人。

薄笑いを浮かべて会釈をしながら彼女の横を通り過ぎる。

千子は絶対に肩が触れないように、大きく身をかわす。

部屋に入った千子は、小さなキッチンの床に買い物袋を置くと、部屋に入る。

最初に目が行くのは、床に置き去りにされた黒い電話機。ランプは光っていない。

朝消去したきり、留守電は入っていないかった。

留守録機能は解除したままだが、油断はできない。

もしかしたら、オン・オフの機能自体が壊れている可能性もある。そうでなければ、留守録機能を解除した電話機に留守録が入っているわけではない。

千子は部屋着に着替えて電気コンロに鍋をかける。そうめんなら食べられそうだった。

テレビを観ていたらウトウトと居眠りしていた。携帯電話の着メロで目が覚める。

明奈からだった。

「元氣」

ちよつと気だるいが、いかにも男受けしそうな声。

「電話、どうなった？」

千子は家デンを拾った事を明奈には話した。

「マジで」。超ラッキーじゃん」

ケタケタと笑いながら、明奈は言った。

「でもさあ……」

千子は少しだけ逡巡しながら「なんか気味悪いんだよ……」

最初から入っていた留守録の話しを彼女に聞かせた。

明奈は興味津々で「うん、うん、それで？」

やたら食いついてくる。

しかし、その後の留守録の話しをすると最後には

「どうせ留守録なんだから、シカトしてればいいじゃん。電話が噛み付いてくるわけでもないしさ」

確かにそうだけれど、あの電話機を部屋に置いてから、時折何かの気配を感じる。

「気のせいだよ。ビクビクしてるからだってば」

明奈は明るく言った。

千子もそうなのだろうと思う。

気にしなければどうと言う事もないのだろう。

ただ、誰にも言っていない番号に、何故かかって来るかは判らない。

あの女はどうしてこの電話機にかけてくるのか……。

「電源抜いちゃえば」

明奈が言った。

「だって会社からかかってくるかも」

「電源抜いたって、通話は普通にできるんだよ」

「うそ……」

「その電源は留守録機能の電源だよ。あと子機」

そう言えば本当に何も付いていない通話するだけの電話機には、電源コードが無い。

千子は明奈に言われて始めて気付いた。コードが初めから付いていたから、繋がなければいけないものと思っていた。

その夜、千子は早速電話機の電源コードを抜いた。

電源ランプは消えたが、なるほど受話器の向こうではちゃんと通話可能なツ——という信号音が鳴っている。

彼女は久しぶりに何の不安も無くベッドに入った。

オフタイマーで点けっぱなしのテレビから、深夜のバラエティー番組の心地よい喧騒が聞こえてくる。

それを微かに感じながら、ゆっくりと眠りに落ちて言った。

【第5話】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

お話はもう暫く続きますので、宜しくお願いいたします（^^）

【第6話】

外から聞こえる鳥のさえずりが心地よかった。

久しぶりに目覚ましの鳴る一瞬前に、自然と目を開けた。

ムクムクと布団の中で朝の喧騒を堪能し、目覚ましが鳴るのを待ってから、軽やかに起き上がる。

カーテン越しの外が白い。

今日も晴れだな。と思いながら、千子は勢いよくカーテンを開けた。

オーブントースターに食パンを入れて、インスタントコーヒーを入れたマグカップに電気ポットからお湯を注ぐ。

コーヒーの香りが、広くは無い部屋を薄っすらと満たす。

意識的鼻で息を吸う。

心地よい香氣かおり

トーストを齧ってコーヒーを飲んで、薄く口紅を塗ってマンションを出た。

一週間が過ぎていた。

留守録のランプは点かない。

とは言うものの、電源を切っているのだからランプが点くはずは無いのだ。

土曜日の夜は何日かぶりに定時で帰宅した。

日曜と祝日が定休で、土曜日は交代で出勤する決まりになっていた。

定時に帰れたら自炊、千子はささやかな節約の為、そう決める事にした。

大分陽が長くなったらしく、曇り空の夕暮れも明るい。
街の灯が、薄闇に滲んでぼんやりと周囲を満たす。

マンションの自室に帰った千子は、不安と興味から留守電の電源コードを再び入れる。

電源ランプが点灯して、ダイヤルボタンの全てもチカチカと赤く点滅を繰り返す。

千子は初めて電話機を備え付けた時と同じように、適当なボタンを押した。

ダイヤルボタンの点滅が消えて、電源ランプだけが……。
いや違う。

留守録ボタンが点滅を繰り返している。

千子の顔から血の気が引いた。

留守録ボタンの赤い点滅……それは留守録が入っていることを示すのだ。

「どうして……？」

千子は恐る恐るボタンを押す。

『6月・18日・午前・1時・15分……』

電源コードを抜いた日だった。

『……してでないの！ 電話に出なさいよ！ ……ゆ……いち……わか
ってるのよ！』

相変わらず途中にノイズが混じっている。

ピーッと音がして録音は切れる。

『6月・19日・午前・1時・15分……』

電話の留守録は続いていた。

毎日入っている。

今日未明の6月24日の午前1時15分まで、毎日同じ時間に留守録が残っていた。

留守録はすべて消去した。

どうして留守録が入っているのかは、全く判らない。

千子はシャワーを浴びていた。

湯気の中に、シャワーの音が染み込んでゆく。

まただ……浴室の外、部屋に誰がいる。

誰かの気配がハッキリとした。

部屋の中を歩き回っている。

うごめく気配が、浴室の中にひたひたと伝わってくる。

シャワーを止めて、しっかりとその気配を確認したかった。しかし千子はそれが出来ない。

確かに感じる人の気配を、確信へと変えるのが怖かった。

シャワーの音が、僅かにその気配を気の滅入りのせいにさせているのだ。

——気のせいだ……。

千子はシャワーのヘッドを手にして、肩からゆっくりとお湯をかける。

ボディーソープの泡が、腕を滑り落ちる。

気のせいだ……だれもいるはずなんて無い。

しかし、部屋の中でうごめく気配は消えない。

目を閉じるのが怖くて、頭の後ろからお湯をかけて髪を洗った。

耳元にお湯がかかる。

部屋をうごめく誰かの気配。

動いている。

部屋の中を徘徊するようにゆらゆらと動く。

そんなに広いはずの無い部屋を、気配は何時までも歩いている。バスルームから出られない。

シャワーカーテンを捲って、ユニットバスのガラス戸越しにその

向こうの様子を探る。

キッチンに面しているバスルームから、部屋の様子はよく判らない。

それでも、部屋をうごめく何かの気配は消えない。

声は出せなかった。

部屋の中を徘徊する何かに、自分の存在が知れるのが怖かった。

静かにシャワーのお湯を絞って止めた。

バスタオルを手にして、体を拭く。

耳を澄ます。

意識を戸の外へ向ける。

もう何も感じない。聞こえない。

気配は消えていた。

やっぱり気のせいなのだろうか……。

千子はそつと戸を開けてキッチンの中を見渡して、部屋に視線を向ける。

誰もいるはずなんてない。

黒色の電話機だけが、部屋の真ん中で静かに沈黙して、何故か薄闇に包まれている。

艶の無い、冷涼な黒色がそこに、ただ置かれている。

【第7話】

また留守電が入っていた。

電源を切つても、留守電は入り続ける。

千子は留守電の女性が呼ぶ男の名前をようやく知る事ができた。

『…ゆう…いち、いるんでしょ。そっちに行くからね。今から行くから！ いるの判ってるんだから』

昨晚の留守電だ。

ノイズで聞き取り難かったが、4回繰り返して聞いてようやくわかった。

それにしてもまさか……この場所がわかるのだろうか？

電話番号がわかるくらいだから、場所も知っているのだろうか。

でも全ては間違いなのに……。

千子は暗たんとして消去ボタンを押す。

もう会社からの電話なんて考えていなかった。

この留守電には何時まで伝言が入り続けるのだろうか。

床に置いた電話機は、今日もくすんだ闇のように黒々としている。

会社は七時に終わった。

最近はだいたいこの時間に終わる。

電車に乗って人混みにもまれながら何時もの乗降駅で降りる。

小雨が降っていた。

千子は小走りに商店街を駆け抜けけると、ぼんやりと街路灯が浮かぶ路地を足早に急いだ。

途中のコンビニで小さなお弁当とカロリーオフのコーラを買う。

コンビニを出ると小雨は上がっていたが、湿度が増したのか景色は薄靄に包まれていた。

街路灯の明かりが、煙った闇に溶け出すように路地を照らす。

千子は小さな靴音をたてて、やはり足早に歩いた。角を曲がって直ぐにマンションが在る。

何気なく集合ポストが目にはいつて、階段の手前で彼女は唐突に足を止めた。

集合ポストの半分はプレートに名前はない。

千子のポストには、苗字だけをローマ字でMORISATOとだけ書いてある。

その下の、つまり千子の真下のあの部屋。あの男のポスト。

そこには、YUICHI TERADA。そう書いてあった。
「テダラユウイチ？」

思わず声が出た。

あの気味の悪い青年が留守電の『ゆういち』かもしれない。
千子は咄嗟にそう考えるしかなかった。

路地に身を乗り出してマンションを見上げる。

薄靄に聳える、僅か三階建てのマンションが闇に佇む。

二階の一番端の部屋に明かりは点いていた。

あの男はいる。

千子は足早に階段を上って三階の自室へ入ると、荷物を置いてベツドに腰掛けた。

少しでも考えて、立ち上がると外へ出た。

二階へ階段を下り、突き当りの部屋の前まで足早に歩く。
湿った風に、靴音が流されてゆく。

自分の部屋と変わらないドアの前に、千子は立った。

自分の部屋とまったく同じドア、外壁。

玄関ドアに表札プレートは無かった。

チャイムに指を伸ばし、ゆっくりとそれを押した。

ドアの向こうで3回、ぼんやりとしたチャイムの音が響く。

少しして、ドアの鍵を内側から開ける音が聞こえる。

また少して、カチャリとドアが少し開いた。

「あの……」千子が声を出す。

「な、なんですか？」

ゆっくりと顔の見える角度までドアが開いた。

俯いた視線は相変わらずで、千子の視線を避けるように彼女の足元を見ている。

「あの……突然ですけど……黒い電話機を少し前に捨てませんでしたか？」

彼の顔が少し横に動いた。

視線が泳ぐような仕草だが、俯いた顔の上半分は前髪で隠れているから千子にはよく判らない。

「なんでですか？」

少し顔の角度が変わって、視線の位置が変わった。

千子は丁度、自分の股間辺りを見られているような気がして、半歩後ろに下がる。

「いえ、何でっていうほどではないのですが……」

「黒い電話機がどうかしたんですか？」

「い、いえ……」

どう説明すればよいのだろう。

「シヨウコちゃんから電話来た？」

男は俯いたまま言った。

口角が微かに上がるのが判った。

「えっ？」

「電話機、拾ったんだろ。キミ」

知っている。この男は知ってるのだ。

「シヨウコちゃんて？」

「ふふ……」

風が吹いたような笑い声をだす。

「シヨウコちゃんは、シヨウコちゃんさ」

「誰？ どうしてあたしの電話番号を知ってるの？」

「さあ……彼女は何でも知ってるから」

冷房の風だろうか……部屋の中から冷気が漂って外に漏れ出してくるようだ。

千子は半袖のブラウスから出た腕を、両腕を交差させて摩った。

男は再び「ふふふ」と笑う。

背中が続く通路の空間が闇に飲み込まれ、やけに心細くて、千子はその場に居たたまれなくなった。

「もういいです」

彼女は後ろ向きに歩いて男の部屋のドアから離れた。

この場所に居てはいけないような気がした。

「彼女は何でも知ってるから……」

最後に顎を上げてこちらを見た男の顔は、やけに青白くて、通路の常夜灯にぼんやりと溶け込むように浮かんでいた。

【最終話】

月末の燃やせないゴミの日。

千子はビニール袋に入れて黒い電話機を処分した。

毎日同じ時間に鳴らない電話機への留守電は続いた。

日を増して、部屋に不快な気配が増え始めて千子は我慢できなくなつたのだ。

奇妙な気配は千子の部屋をうろつきまわる頻度を増した。

気のせいじゃない。

何かがこの部屋をうろついている。

あのうろつく気配が何者なのか、もうどうでもいい。

電話機を部屋に置いてから、奇妙な事が続くようになった。

おそらく原因は黒い電話機に在るような気がした……理由はそれで充分だった。

朝、ゴミの集積所に無造作にゴミ袋を捨てた。

これでいい。

振り返り集合ポストの横を通り過ぎる。

ふと見ると、自分の真下の部屋のポストには名前が無い。

この前はあったはずの『YUICHI TERADA』の表札だ。確かにあったはずなのに、そのポストには真つ白なプレートが掲げられている。

引越してもしたのだろうか？

あの晩会ったあの男が引っ越したのなら、いい事じゃない。そう思った。

間近で見るとまるで生気を感じなかった。

時々階段ですれ違う時も、そうだったかもしれぬ。

もう不快な思いをしなくていい。

もう会いたくはない人間だ。

その日は定時に仕事が終わった。

電車を降りて改札を抜けた時、なんとなく見覚えのある女性と目があつた。

「あつ」

小さく声をだして、むこうが笑顔で会釈する。

千子もつられるように会釈しながら、誰だったか考えた。

同じマンションに住む、二階の住人だ。

名前までは知らないが、千子があのでマンションに越してきた時には既に住んでいた。

少し派手な洋服をまとうて化粧も濃い。どんな仕事をしているのかも知らない。

「ねえ、あそこの部屋やつと入居したんだって」

「えっ？」

千子には何の話か判らない。

この女性と話しをするのも初めての事だ。

「201号室よ」

「ああ、もう他の人決まったんですか」

「もうって、なに？ あそこは2年間以上ずっと空きっぱなしよ」

千子は一瞬、眩暈がするほどの悪寒を感じた。

商店街にあるゲームセンターの自動ドアが開いた瞬間、電子的な喧騒が流れ出てきた。

「えっ？」

「ああ、あなた、あの事件の後に入ってたんだね」

「事件？」

「まあ、新しい入居者が入ったって事は、もう時効よね」

女は話題に似合わない、妙に色っぽい笑みを零す。

薄闇を照らす商店街のぼんやりとした明かりに包まれて、彼女の笑みだけが明朗に浮かぶ。

千子は目の前の女の唇をぼんやりと眺めた。

紅いグロスがテラテラと艶やかだ。

201号室の男は二年前に亡くなっていた。

男女交際でのトラブルで、女性が部屋に乗り込んで来て彼をめた刺しにしたらしい。

そして女もまた、自分を刺して命を絶ったのだ。

千子が上京する少し前の話だという。

千子は翌日、マンションを管理している池袋の不動産屋に足を運んだ。

事件の事についてはほとんど話しは聞けなかったが、マンションの地下倉庫にしまっていた粗大ごみを、少し前に少々処分したという話を聞いた。

あの時千子が見た粗大ゴミだろう。

管理会社がマンションの倉庫にしまっていたモノを、ゴミ捨て場に処分したところ、千子は電話機だけを拾ったのだ。

そしてあの電話機は、201号室で亡くなったあの男。テラダユウイチのモノなのだろうか。

千子の部屋を徘徊した気配は、ユウイチなのか、それともショウウコなのか。

引越したい……。

千子の本心はこのマンションから出たかった。しかし引越しにはまとまった金が必要になる。敷金に戻ってきて、引越する為に必要な金額には及ばない。あの事件の後住人はほぼ入れ替わったのに、未だに住んでいるあの女性もおそらくは同じ理由かもしれない。

それでもその後の日々は平穏だった。

普通に仕事をして、家に帰ってテレビを観ながら夕飯を食べて。バスルームでシャワーを浴びていても、扉の外には何の気配も感じない。

安堵の日々。

残業は相変わらずあったけれど、何度か仕事帰りに同僚と酒を飲みに行ったりもした。

留守録ランプの怪しい光を発する電話機も、もうない。

さらに時間は過ぎてゆく。

夏空が上空に広がり、ビルの向こうに入道雲が見えた。

ミラーガラスの景色は、陽光をガラガラと撒き散らす。

会社帰り、児童公園の木々でジジジ……と蝉が鳴いている。

千子は相変わらず通勤時もＯＬルックのままだった。さすがにこの蒸し暑さでは、ブラウスだけのラフな格好だけれど。

蝉の声にふと立ち止まった千子は、カバンの中で光る物を目にした。

携帯電話に留守録伝言が入っている事を示すランプが、チカチカと点滅していた。

電車に乗っている間に、誰かから電話がきたのだろうか……？

千子はその場で携帯電話を手にとると、開いた画面を見る。

確かに留守録が入っていた。

留守録再生のショートカットボタンを押す。

親指の爪に塗られた透明なマニユキアが街路灯に照らされてテラテラと光った。

再生が始まる。

スピーカーからガサガサッと何かを擦る音が聞こえて彼女は耳をすました。

児童公園の蝉の声がうるさくて、少し歩いた。

月のない闇に、街路灯の明かりだけが煌々と立ち並んでいる。

微かにザザザ……とノイズが聞こえる。

音声が小さくて、さらに耳をすました。

『……いち、いるんですよ。わかってるんだからね。いるのわかってんだから……』

— E N D —

【最終話】（後書き）

お読み頂き有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7134h/>

『留守デン』

2010年10月8日15時17分発行